ベストピア Bestopia
第426号
2022年8月号
パリ通信
第128号

8月に考えること

「戦争と平和」のどちらを選ぶか

8月生まれの私は毎年月初めから憂鬱になる。6日、9日、11日、15日に昨年から8日が加わった。11日は私の誕生日であり、8日は昨年88歳で逝去された片山　克さんの命日だから個人的にもやるせない悔恨を感じる日々が続く。6日、9日と15日は人類が忘れてはならない日である。
今年の平和記念式典は被爆体験者の高齢化（平均84歳）を踏まえて後継者の養成を強く意識されていると感じた。心に響いたいくつかを集めて記したい。

１、広島、小学生による「平和への誓い」

　1万通をこえる作文の中から20名を選出して、小学生だけで「平和への誓い」の文章を練るという過程も今年は報道された。毎年感動的な文章になっている。（ベストピアでは毎年取り上げてきた）。今年も現実をよく観察し、完結明瞭な子供たちの感性がイキイキ伝わる「平和の誓い」となっています。「本当の強さ」は心の隅々に響き渡ります。

こども代表　平和の誓い

広島市立幟町小学校６年　　バルバラ・アレックス
広島市立中島小学校６年　山崎　鈴(やまさき　りん)

あなたにとって、大切な人は誰ですか。家族、友だち、先生。
私たちには、大切な人がたくさんいます。大切な人と一緒に過ごす。
笑い合う。そんな当たり前の日常はとても幸せです。

昭和２０年（１９４５年）８月６日　午前８時１５分。道に転がる死体。
死体で埋め尽くされた川。
「水をくれ。」「水をください。」という声。
大切な人を一瞬で亡くし、当たり前の日常や未来が突然奪われました。

あれから７７年経ちました。

今この瞬間も、日常を奪われている人たちが世界にはいます。
戦争は、昔のことではないのです。

自分が優位に立ち、自分の考えを押し通すこと、
それは、強さとは言えません。
本当の強さとは、違いを認め、相手を受け入れること、
思いやりの心をもち、相手を理解しようとすることです。
本当の強さをもてば、戦争は起こらないはずです。

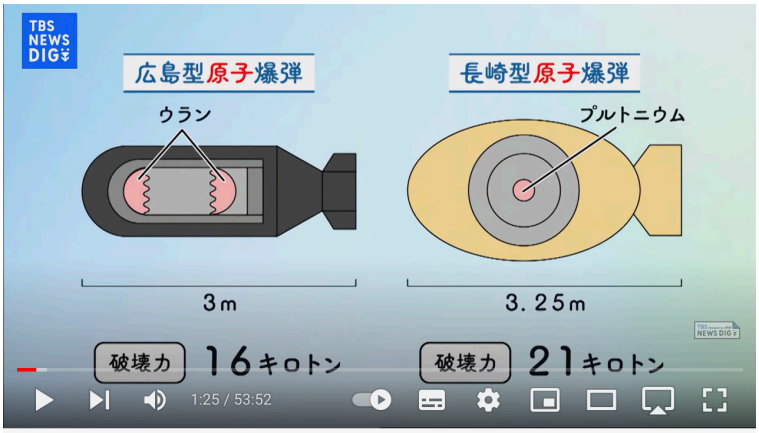
過去に起こったことを変えることはできません。
しかし、未来は創ることができます。
悲しみを受け止め、立ち上がった被爆者は、
私たちのために、平和な広島を創ってくれました。

今度は私たちの番です。
被爆者の声を聞き、思いを想像すること。
その思いをたくさんの人に伝えること。
そして、自分も周りの人も大切にし、互いに助け合うこと。

世界中の人の目に、平和な景色が映し出される未来を創るため、
私たちは、行動していくことを誓います。　　令和4年(2022年)8月6日

２、広島市長松井一実氏の宣言抜粋

（前略）ロシアによるウクライナ侵攻では、国民の生命と財産を守る為政者が国民を戦争の道具として使い、他国の罪のない市民の命や日常を奪っています。そして、世界中で、核兵器による抑止力なくして平和は維持できないという考えが勢いを増しています。これらは、これまでの戦争体験から、核兵器のない平和な世界の実現を目指すこととした人類の決意に背くことではないでしょうか。武力によらずに平和を維持する理想を追求することを放棄し、現状やむなしとすることは、人類の存続を危うくすることにほかなりません。過ちをこれ以上繰り返してはなりません。とりわけ、為政者に核のボタンを預けるということは、１９４５年８月６日の地獄絵図の再現を許すことであり、人類を核の脅威にさらし続けるものです。一刻も早く全ての核のボタンを無用のものにし



なくてはなりません。（中略）また、他者を威嚇し、その存在をも否定するという行動をしてまで自分中心の考えを貫くことが許されてよいのでしょうか。私たちは、今改めて、「戦争と平和」で知られるロシアの文豪トルストイが残した「他人の不幸の上に自分の幸福を築いてはならない。他人の幸福の中にこそ、自分の幸福もあるのだ」という言葉をかみ締めるべきです。（中略）今年初めに、核兵器保有５カ国は「核戦争に勝者はなく、決して戦ってはならない」「ＮＰＴ（核兵器不拡散条約）の義務を果たしていく」という声明を発表しました。それにもかかわらず、それを着実に履行しようとしないばかりか、核兵器を使う可能性を示唆した国があります。なぜなのでしょうか。（中略）今年６月に開催された核兵器禁止条約の第１回締約国会議では、ロシアの侵攻がある中、核兵器の脅威を断固として拒否する宣言が行われました。また、核兵器に依存している国がオブザーバー参加する中で、核兵器禁止条約がＮＰＴに貢献し、補完するものであることも強調されました。日本政府には、こうしたことを踏まえ、まずはＮＰＴ再検討会議での橋渡し役を果たすとともに、次回の締約国会議に是非とも参加し、一刻も早く締約国となり、核兵器廃絶に向けた動きを後押しすることを強く求めます。（後略）

３、長崎市長　田上富久の平和宣言

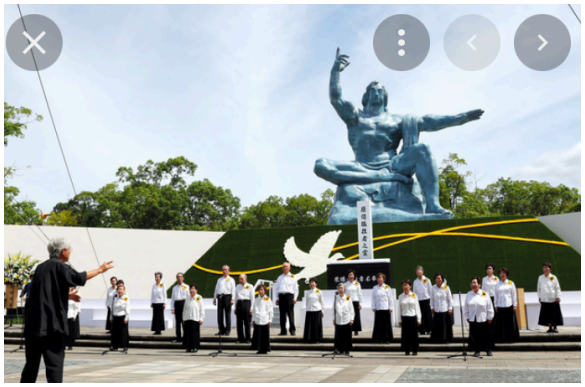
（前略）今年1月、アメリカ、ロシア、イギリス、フランス、中国の核保有5か国首脳は「核戦争に勝者はいない。決して戦ってはならない」という共同声明を世界に発信しました。しかし、その翌月にはロシアがウクライナに侵攻。核兵器による威嚇を行い、世界に戦慄を走らせました。
この出来事は、核兵器の使用が“杞憂”ではなく“今ここにある危機”であることを世界に示しました。世界に核兵器がある限り、人間の誤った判断や、機械の誤作動、テロ行為などによって核兵器が使われてしまうリスクに、私たち人類は常に直面しているという現実を突き付けたのです。
核兵器によって国を守ろうという考え方の下で、核兵器に依存する国が増え、世界はますます危険になっています。持っていても使われることはないだろうというのは、幻想であり期待に過ぎません。「存在する限りは使われる」。核兵器をなくすことが、地球と人類の未来を守るための唯一の現実的な道だということを、今こそ私たちは認識しなければなりません。日本政府と国会議員に訴えます。
「戦争をしない」と決意した憲法を持つ国として、国際社会の中で、平時からの平和外交を展開するリーダーシップを発揮してください。
非核三原則を持つ国として、「核共有」など核への依存を強める方向ではなく、「北東アジア非核兵器地帯」構想のように核に頼らない方向へ進む議論をこそ、先導してください。
そして唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約に署名、批准し、核兵器のない世界を実現する推進力となることを求めます。
私たちの市民社会は、戦争の温床にも、平和の礎にもなり得ます。不信感を広め、恐怖心をあおり、暴力で解決しようとする“戦争の文化”ではなく、信頼を広め、他者を尊重し、話し合いで解決しようとする“平和の文化”を、市民社会の中にたゆむことなく根づかせて

いきましょう。高校生平和大使たちの合言葉「微力だけど無力じゃない」を、平和を求める私たち一人ひとりの合言葉にしていきましょう。

二人の宣言文には力強さの違いがあります。なぜなのだろうか？
マンネリ化、権力への忖度を超えた訴えが後継者に伝わる。

４、長崎・被爆者合唱は今年が最後に

長崎の被爆者でつくる合唱団、「被爆者歌う会『ひまわり』」は、２００４年に発足し、長崎原爆の日の平和祈念式典で代表曲「もう二度と」を披露していますが、メンバーの平均年齢が８１歳と高齢化し、式典への参加はことしが最後です。
９日は参列者が見守る中、メンバーは式典の冒頭で力強い歌声を披露し、「もう二度と被爆者を作らないでほしい」と訴えていました。


今回最後の合唱となる

もう二度と　寺井一通 作詞・作曲

1. 聞こえていますか 被爆者の声が
あなたの耳に 聞こえていますか
もう二度と作らないで わたしたち被爆者を
あの青い空さえ 悲しみの色。

2. 覚えていますか ヒロシマ・ナガサキ
いのちも愛も 燃え尽きたことを
もう二度と作らないで わたしたち被爆者を
あの忌まわしい日を 繰り返さないで。

3. 聞こえていますか 世界の国から
平和を願う 声がするでしょう
もう二度と作らないで わたしたち被爆者を
この広い世界の 人々の中に。

次世代の新しい作詞作曲が望まれる。

５、被爆者代表　宮田　隆さん「平和宣言」<u>今や核は抑止にあらず。</u>

この方は今年6月ウィーンで開かれた核兵器禁止条約第１回締約国会議に参加し、会場や路上で、横文字で「ＨＩＢＡＫＵＳＨＡ」と書いたビブス、ゼッケンを着用して訴え世界の若者と会話をして、9日の式典で被爆者代表として力強い訴えを行なった。写真はウイーンで若者と会話中の宮田さん。現実を鋭く分析して、非常に力づよく政権に訴えています。核共有論が強まる風潮が支配的になりつつある世論にも訴えています。

被爆者代表平和宣言

「まず初めに、ウクライナでの多くの犠牲者に心から哀悼の意を表します。容赦ない無差別攻撃は、７７年前の無実の長崎市民が体験した原爆投下と重なります。断じて許せません。

今年２月２４日、ウクライナに鳴り響く空襲警報のサイレンは、あのピカドンの恐怖そのものでした。（中略）本日ご列席の国会議員、県議会・市議会議員のリーダーの皆さま、被爆者とじかに対面し、被爆者の心の痛みと被爆の実相を聞いて、世界に広く伝えてください　（中略）第２次世界大戦から７７年後の今、ロシアの核兵器の使用を示唆する警告によって、世界は今や核戦争の危機に直面しています。日本の一部の国会議員の核共有論は、私たち被爆者が願う核の傘からの価値観の転換とは真逆です。核共有論は、「力には力」の旧来の核依存思考であり、断じて反対です。<u>今や核は抑止にあらず。</u>今こそ日本は、核の傘からの価値観を転換し、平和国家の構築に全力を挙げるべきです。（中略）そのためには、日本は歴史に学び、北東アジア非核兵器地帯を宣言し、日本国憲法第９条を厳守すること。あの第２次世界大戦の英霊約３００万人と長崎原爆犠牲者約２０万人の魂の叫びを込めて、二度と戦争をしない国民の強い意志と、国家としての戦争放棄は、戦後、確かに国民の命を守ってきました。対話による平和外交こそ、新たな時代への挑戦です。特に、被爆地選出の岸田首相の、被爆者の心に響く、大胆な行動をご期待申し上げます。（中略）　そして、日本政府は核兵器禁止条約に一刻も早く署名・批准してください。昨年発効した核兵器禁止条約は、私たち被爆者と全人類の宝です。この条約を守り、行動することは、唯一の被爆国である日本政府と私たち国民一人ひとりの責務であると信じます。　私たち被爆者は、この７７年間、怒り、悲しみも苦しみも乗り越えて、生

きてまいりました。これからも私たちは、世界の市民社会と世界の被害者と連携して、核兵器のない明るい希望ある未来を信じて、さらにたくましく生きてまいります。核兵器禁止条約をバネに、新しい時代の始まりであることを自覚し、私たちは強い意志で、子ども、孫の時代に一日三食の飯が食え、「核兵器のない世界実現への願い」を引き継いでいくことをここに誓います　２０２２年（令和４年）８月９日

宮田さんは国会議員の一部と一歩下がったところから話されていますが、保守層は政党政治でがんじがらめになっていますから今や民主主義の隠れた独裁体制です。個人の良心が反映されることは難しい、そこに危機があります。

６、「千羽鶴」合唱

この歌は被曝５０周年を記念して全国から歌詞を募集して曲は長崎市出身の大島ミチルさんがつけたものです。

作詞 横山 鼎、作曲 大島 ミチル

1. 平和への誓い新たに
   緋の色の鶴を折る
   清らかな心のままに
   白い鶴折りたたみ
   わきあがる熱き思いを
   赤色の鶴に折る

2. 平和への祈りは深く
   紫の鶴を折る
   野の果てに埋もれし人に
   黄色い鶴折りたたみ
   水底に沈みし人に
   青色の鶴を折る

3. 平和への願いをこめて
   緑なる鶴を折る
   地球より重い生命よ
   藍の鶴折りたたみ
   未来への希望と夢を
   桃色の鶴に折る
   未来への希望と夢を
   虹色の鶴に折る

祈りのひととき

平和を求める祈り　聖フランシスコ

神よ、
わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。

憎しみのあるところに愛を、
いさかいのあるところにゆるしを、
分裂のあるところに一致を、
疑惑のあるところに信仰を、
誤っているところに真理を、
絶望のあるところに希望を、
闇に光を、
悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください。

慰められるよりは慰めることを、
理解されるよりは理解することを、
愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。

わたしたちは、与えるから受け、ゆるすからゆるされ、
自分を捨てて死に、
永遠のいのちをいただくのですから。

７、「罪と罰」の最後の夢

誕生日を挟んで私はドストエフスキーの「罪と罰」に苦闘した。

きっかけは安倍事件であったが、私の教養のなさのための葛藤であったかも知れない。8月号に載せることが出来ないままにギブアップした。だが、ドストフェスキーの小説の構成の巧みさには驚きの連続であった。主人公はよく夢を見た。その夢に謎が多い。最後の夢もエピローグの文脈に関係ない夢だ。罪と罰は多くの方々に読まれているが、この最後の夢を覚えている人は少ないのではないだろうか。一応ハッピーエンドのように見せながら、何か不安を暗示させる小説である。

パンデミック関連で昨年「白の闇」を紹介したが、それ以上に恐ろしい心理的なパンデミック、そしてそれは部分的に実現するかも知れない。ギブアップにもがきながらその夢を紹介します。

新潮文庫版・下巻p573-574引用

彼は大斎期の終りから復活祭週いっぱい病院に寝ていた。もうよくなりかけた頃、彼は熱にうかされていた頃に見た夢を思い出した。（この書き方も凝っている）彼は病気の間にこんな夢を見たのである。

全世界が、アジアの奥地からヨーロッパにひろがっていくある恐ろしい、見たことも聞いたこともないような疫病の犠牲になる運命になった。ごく少数のある選ばれた人々を除いては、全部死ななければならなかった。それは人体にとりつく微生物で、新しい旋毛虫のようなものだった。しかもこれらの微生物は知恵と意志を与えられた魔性だった。これにとりつかれた人々は、たちまち凶暴な狂人になった。しかも感染すると、かつて人々が一度も決して抱いたことがないほどの強烈な自信をもって、自分は聡明で、自分の信念は正しいと思いこむようになるのである。自分の判決、自分の理論、自分の道徳上の信念、自分の信仰を、これほど絶対だと信じた人々は、かつてなかった。全村、全都市、全民族が感染して、狂人になった。すべての人々が不安におののき、互いに相手が理解できず、一人一人が自分だけが真理を知っていると考えて、他の人々を見ては苦しみ、自分の胸を殴りつけ、手をもみしだきながら泣いた。誰をどう裁いていいのか、わからなかったし、何を悪とし、何を善とするか、意見が一致しなかった。誰を有罪とし、誰を無罪とするか、わからなかった。人々はつまらないうらみで互いに殺し合った。互いに軍隊を集めたが、軍隊は行軍の途中で、とつぜん内輪もめが起った。列は乱れ、兵士たちは互いに躍りかかって、斬り合い殴り合いをはじめ、噛みつき、互いに相手の肉を食い合った。町々で警鐘を鳴らし、みんなを招集したが、誰が何のために呼び集めたのか、それが誰にもわからず、みんな不安におののいていた。めいめいが勝手な考えや改良案を持ち出して、意見がまとまらないので、ごくありふれた日常の手工業まで放棄されてしまって、農業だけがのこった。そちこちに人々がかたまり合って、何かで意見を合わせて、分裂しないことを誓い合ったが、ーーー たちまち何かいま申し合せたこととまったくちがうことが持ち上がり罪のなすり合いをはじめて、つかみ合ったり、斬り合ったりするのだった。火事が起り、飢饉がはじまった。人も物ものこらず亡びてしまった。疫病は成長し、ますますひろがっていった。全世界でこの災厄を逃れることができたのは、わずか数人の人々だった。

それは新しい人種と新しい生活を創り、地上を更新し浄化する使命をおびた純粋な選ばれた人々だったが、誰もどこにもそれらの人々を見たことがなかったし、誰もそれらの人々の声や言葉を聞いた者はなかった。（引用終わり。棒線は小原）

主人公ラスコーリニコフが最初に見る夢は、老婆殺しをする前である。上巻p 115から10頁に渡り詳細であるが、その初めの部分を引用します。

病的な状態で見る夢は、間々、異常に鮮明で、気味わるいほど現実に似通っていることがある。時によると、奇怪な光景が描き出されるが、その夢ものがたりの舞台装置や筋のはこびが、あまりにも正確で、しかもそのデテールがびっくりするほど細密で、唐突だが、芸術的に絵全体が実にみごとに調和している。それでその夢を見た本人が、たとえプウシキンかツルゲーネフのようなすぐれた芸術家でも、現のときにはとても考え出せないというような場合があるものだ。このような夢、つまり病的な夢は、いつも長く記憶にのこっていて、調子をみだされてたかぶった人間の神経に強烈な印象をあたえるものである。

（p115引用、全体1076頁の長編小説の初めに犯行を匂わせる夢を見る。本論が始まる。）ここから始まる夢の内容を引用することは読者の権利を侵害することになると思い割愛します。

こうした小説の構成や章節の区切り、句読点、……の多句読点の活用による読者への迫り方は日本の小説家にも影響を与えたに違いない。その思想の広がりはニーチェが絶賛するほどに世界的な哲学、芸術にも影響が見られる。今日でも多くの読者が虜になる名作であると言われている。飛ばし読み厳禁の文学作品である。

パリ通信第128号

アリスティッド・マイヨル展

8月のパリはがらんとしている。
2019年コロナ禍から3年振りのバカンス、だれにとっても待ちに待った夏休み。ウクライナ戦争に起因するインフレで節約旅行を強いられるが、フランス国内どこもバカンス客で一杯だ。中国、日本、韓国などアジア人はまだ少ないが、アメリカ人観光客がパリに戻り経済活性化に貢献している。時々食べに行くモンパルナスのとんかつ屋さんも8月は休み。家に近い日本食スーパーも8月末まで休業。

パリは今夏記録的な猛暑で、昼間は外を歩けない日もある。年度末の土木工事だけがパリ市内あちらこちらで行われ、暑い中アスファルトを掘り返している。家の真下の道路も朝から大型ハンマーでがんがん地響きする程の騒音で頭が痛くなり、涼しい静かなところへ避難せざるを得ない。そのような訳で間もなく終わる「アリスティッド・マイヨル展」(オルセー美術館)(2022年4月12日～8月21日)を見に行くことにした。平日の午前中で人も少なくゆっくりと見ることができた。

オーギュスト・ロダン(1840-1917)とともにフランス印象派以後の彫刻を代表するアリスティッド・マイヨル(1861-1944)はペルピニャンからさらに南、スペインとの国境近くの港町バニュリュス・シュル・メールに生まれる。画家を志し1885年パリ・ボザールに席を置き、1888年からサロンに出展する。ゴーギャンとの出会いが画家としてのマイヨルに影響し、ポール・ボナール、エドワール・ビュイヤール、モーリス・ドウニなど「ナビ派」の画家に共通する平らで単純化された装飾的な作品を描いた。

1892年「日傘の女性」(190,50 x 149,60 cm オルセー美術館所蔵)はその最たる例である。1890年代は絵画の他、刺繍、タペストリー、陶器、木彫りなどの形態を模索する。そして1896年クロチルド・ナルシスとの結婚を機に、裸婦の彫刻家マイヨルへの道が開かれる。

「地中海」(1905年石膏、1923-1927年大理石、高さ110,40cm, 幅117,50cm, 奥行き68,50cm)、「夜」(1908-1912年、ロレーヌ石灰岩、高さ104cm, 幅77,50cm, 奥行き108cm)の大作が生まれ、以後、地中海の女性を象徴するふくよかで、逞しく、力強くも軽やかで、調和のとれた大きな裸婦の女性像が次々に出来上がるのである。

「三つの影」に代表されるようにロダンの彫刻は男性の美、ミケランジェロに匹敵する力強い筋肉の躍動であるのに対して、マイヨルの彫刻は優しさと力強さ、柔らかな曲線、滑らかで純化された表面、前を向いた若い女性の美しさである。従って、真っ白で冷たく切れるようなイタリアの大理石よりもピレネー山脈産のピンクがかった大理石を、銅よりも鉛を好んでいる。

今回の展覧会では「セザンヌに捧げるモニュメント」(1912-1925年)と「空気」(1938年)が隣り合わせで展示されている。ともに国の注文であり、作曲家ク

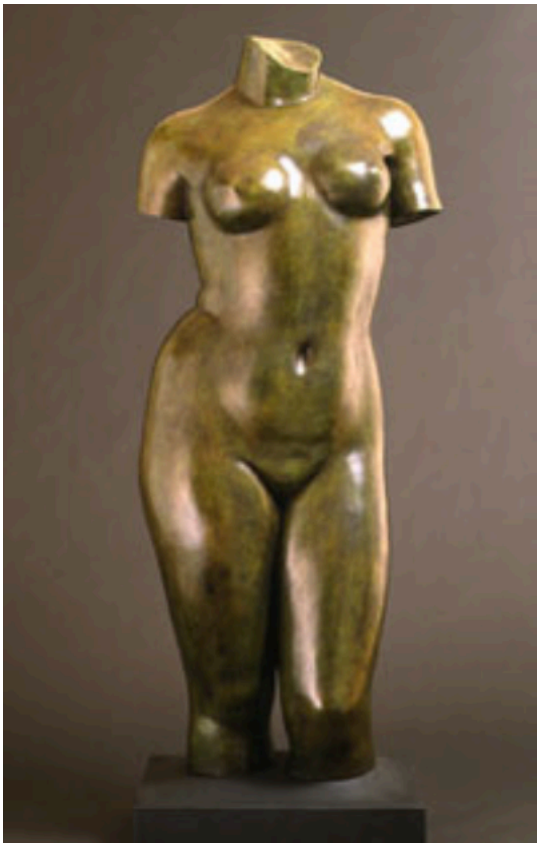
ロード・ドビュッシーへのモニュメントもある。「空気」はパリ・チュイルリー公園に鉛像としても置かれている。「空気」のモデルとなり、今日のマイヨル美術館を始め、マイヨルの裸婦像がパリ日常に受け継がれているのはディナ・ヴィエルニー(1919-2009)のお陰である。1919年当時ルーマニア(現在モルダヴィア)に生まれ、15歳の時からマイヨルのミューズとしてモデルを勤め、1944年マイヨルが亡くなると遺産相続人となる。画廊として「ナイーブ派」と呼ばれる画家たち(税関吏ルソー、カミーユ・ボンボワ、アンドレ・ボーシャン、ルイ・ヴィヴァン、セラフィーヌ・ド・サンリス)のコレクターとなり、1983年「ディナ・ヴィエルニー財団」を設立し、1995年現在のマイヨル美術館を開くのである。

同じくチュイルリー公園内置かれた「川」は、1964年ディナ・ヴィエルニーと当時の文化大臣アンドレ・マルローによって屋外設置用に鉛像として鋳造された。

絵画と異なり彫刻には圧倒的な存在感がある。滑らかな大きな石の重量、純化された優しさと強さを秘めたマイヨルの作品に向かっていると心の空洞が埋まるような気持ちになる。（古賀順子記）

日本で見れるマイヨール代表作《ヴィーナス》の構想段階

群馬県立近代美術館所蔵



マイヨールは、簡素な造形による無名の女性のすがたによって、女性の永遠の魅力を追求した。マイヨールは1928年に代表作《ヴィーナス》を完成させる。本作品は18年にその最初の構想段階で制作された、顔、両腕を欠くトルソである。「ギリシャの彫刻は腕がない方が美しいことが多い」と述べたマイヨールは、トルソの美しさを讃え、トルソから制作を始めるのが常であった。

マイヨールにとって、ヴィーナスの名前が、永遠の女性を意味したように、かれには、個性的な顔や雄弁な手を欠くトルソこそ、普遍的で本質的な女性の美しさを表現できる最良のかたちであった。本作品は、すでに完成作品と同じように、右下に向かう首の動き、そして、左右それぞれ角度を違える両腕の傾きまで見事に表現され、力強い存在感に満ちている。なお、本作品と同じく、《ヴィーナス》の構想段階に制作された《ヴィーナスのトルソ》（1925）は国立西洋美術館に所蔵されている。（群馬県立近代美術館HPより引用）